

平成21年度学校体育振興事業

「中学校武道必修化に向けた地域連携指導実践校」

研究報告書

ふりがな 学校名	かみしりつかがみのちゅうがっこう 香美市立鏡野中学校
-------------	-------------------------------

校長名：岡本嘉文

所在地：高知県香美市土佐山田町楠目1973

電話番号：0887-53-4131

中学校武道必修化に向けた  
地域連携指導に関する研究

I 研究実践校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

本校は、小学校6校と広い校区をもつ。地元には3つの少年剣道教室があり、剣道部も活発に活動している。4名の保健体育科教員のうち1名が剣道有段者、1名が剣道は専門外だが居合道有段者で剣道の授業経験者である。また、地域の外部指導者にも協力を求めることができる環境である。生徒の中にも剣道経験者が男女を問わず多い。

2 学校の概要

	1年	2年	3年	特別支援 学級	計	
学級数	6	4	4	2	16	
生徒数	男	88	68	71	2	229
	女	84	66	76	2	228

教員数 35名 (保健体育科 4名)

武道・ダンスの授業の状況

領域:武道 領域の内容:剣道

	1年	2年	3年	特別支援学級	計	
配当時間	9	9	9	0	27	
担当教員数 (外部指導者)	2	2	2	2	8	
生徒数	男	88	68	71	2	229
	女	84	66	76	2	228

領域:ダンス 領域の内容:フォークダンス

	1年	2年	3年	特別支援学級	計	
配当時間	5	5	5	0	15	
担当教員数 (外部指導者)	2	2	2	2	8	
生徒数	男	88	68	71	2	229
	女	84	66	76	2	228

II 研究の内容及び成果等

【研究成果の要点】

昨年度は、武道の授業実践は男子のみであったが、本年度は全学年が授業を実施し、特に二年生の女子を対象に、本校の研究主題に沿いながら、学校の実態にあった武道の学習の在り方について研究に取り組んだ。

授業実践では、班での教え合いや対人練習を積極的に仕組むことで、剣道の特性（対人性）を生かしたかかわり合いが生み出され、自ら進んでやってみようという意欲の向上につながった。また、事前調査では、寒い・痛い・臭いというマイナスイメージをもった生徒も多く、剣道嫌いが出てくることを懸念していたが、防具を準備し、打ち合いのできる授業展開を工夫したことで、生徒の興味が高まり、剣道はカッコいいというイメージや、またやってみたいという感想をもたせることができた。

また、地域連携指導推進協力者会議の助言を受けて授業内容を工夫したり、県の指導者講習会に参加したりすることで、教師側の意識も高くなった。

1 研究主題等

(1) 研究主題

『学ぶ意欲』をどう育てるか

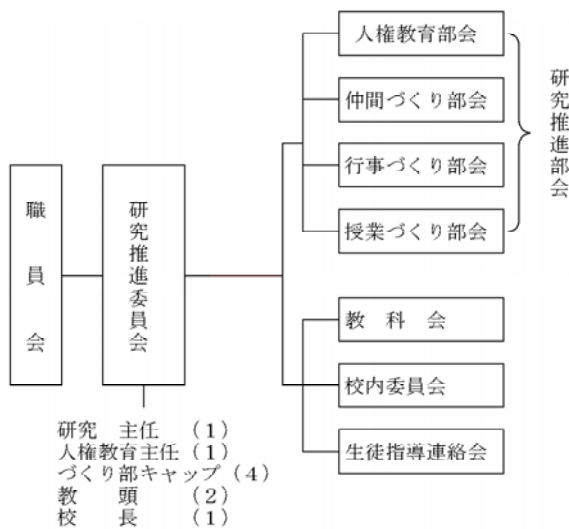
～かかわり合いを生み出す班活動を通して～

(2) 研究主題設定のねらい

鏡野中の考える『学ぶ意欲』とは、好き嫌いで物事を捉えずやってみようとする、分か

らないときに分からないと言える、分からないところから出発して分かろうとする、仲間とともに考えようとする、学んだことをさらに発展させて考える、学んだことを生活や次の授業に生かそうとする意欲であり態度である。その意欲と態度を育てるためには、班でのかかわりが必須であり、かかわらざるをえない班活動を仕組むことによって、学びの質も高まるものと考え、この研究主題を設定している。

### (3) 取組体制



### (4) 主な取組

平成21年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業づくり部会での教材研究</li> <li>・協力者会議の内容の活用</li> <li>・指導者講習会参加による自己研修</li> <li>・研究授業の実施</li> </ul> <p>(協力者会議・地区内研修)</p>
--------	---

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 具体的な研究課題

学校の実態にあった武道学習の在り方

### (2) 取組

#### ① 興味・関心のもてる環境づくり

本校には、市の武道館が併設しており、剣道場を使つての授業が可能であった。日本古来の伝統文化である剣道の成り立ちや礼を重んじる特色を、生徒達に体感・理解

させる上でも効果的であったと言える。

また、館内に掲示物を貼ったり、模造刀を持参したり、指導者が毎授業時間剣道着と袴を着用して授業を行ったり、雰囲気づくりを大切にして授業に取り組んだ。

さらに、防具を購入し男女別に使用した。垂ネームは、安価なものを個人購入してもらい、形からしっかり整えた。

### ② 指導力向上

まずは教師自身が変わろうということで、夏の指導者講習会に参加した。剣道未経験者も「ああいう授業ならやれそうだ」という感想を持ち帰り、授業も実施できた。また、剣道有段者にとっても、新しい剣道授業をつくる上でのよい刺激となった。

### ③ 地域との連携

本校は、地元には3つの少年剣道教室を有するが、ここ数年中学校で、剣道をやらない生徒が出てきている。剣道離れの抑制のためにも、中学校と地域の連携を図っていかなくてはならないと考えた。少年剣道教室と合同練習を行ったり、地域の指導者の方々に練習での助言をもらいながら、交流を深めた。

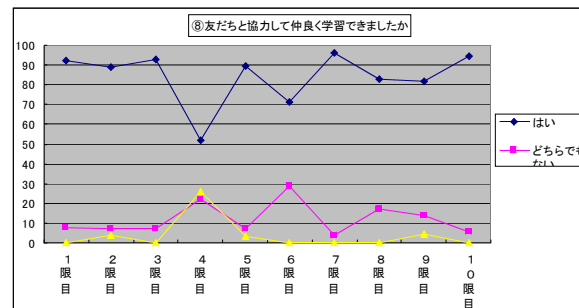
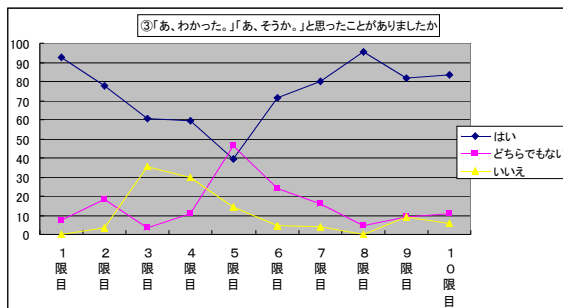
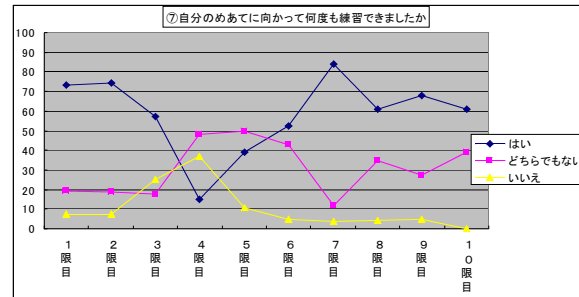
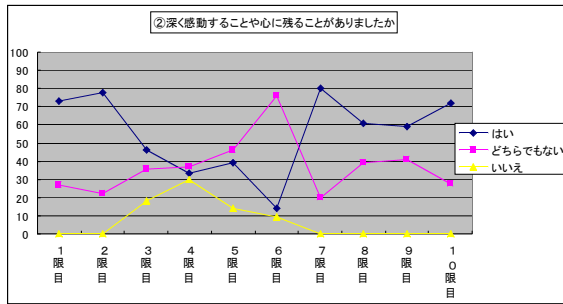
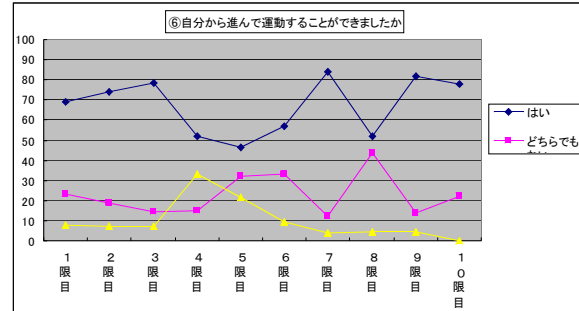
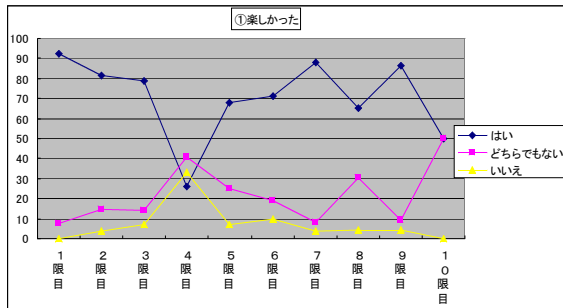
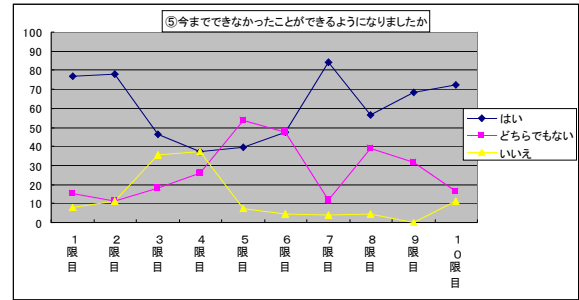
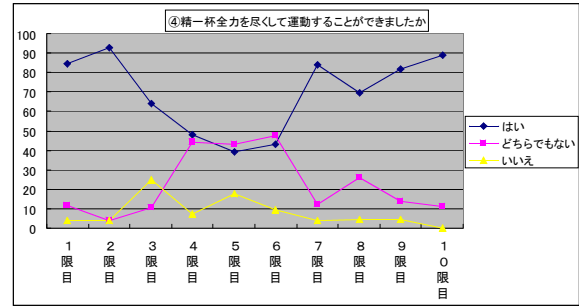
### ④ アンケート調査の活用

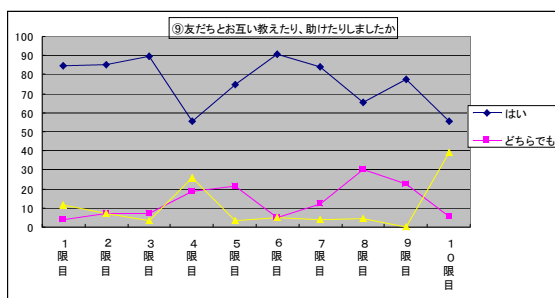
毎時間授業終了後に調査を実施し、授業改善に役立てた。

### <考察>

1～3時間目が、オリエンテーションや基本動作の時間にもかかわらず①「楽しさ」⑧「協力」⑨「教え合い」などのポイントが高かったのは、導入時に体ほぐしの運動を入れて、コミュニケーションを図ったからではないかと考える。剣道に限らず、武道には堅苦しいイメージがもたれがちなので、心をほぐして柔らかい雰囲気で行おうというねらいと、寒い時期だったので説明に終始せず体を使うことを意識して取り組んだ結果だと考える。次に、ほとんどの項

目が4時間目に落ちこんでいるのは、防具着けに悪戦苦闘して竹刀を操作する時間が少なかったことが原因ではないかと考える。その後の授業では、ペア練習やグループ練習で教え合いを多く仕組んだので改善傾向に向かった。10時間目の①「楽しさ」ポイントが低かったのは、テスト実施で緊張したのではないかと考える。⑤の「今までできなかったことができるようになった」というのが7時間目に大きく伸びているが、この時間は防具を着けての面打ちをやった時間である。竹刀を打つという対人での面打ちは、それまでの時間で経験していたことに加えて、5時間目に胴打ちを体験した後で面打ちの方が簡単に感じたのではないかと考える。





### (3) 成果・課題

成果として、はじめに生徒感想を転記する。

#### 【生徒感想】

\*剣道は初めてだったので、内心わくわくしました。けれど、たくさん分からないことがあり、防具の着け方も最初はなかなか早く着けることができませんでしたが友達に教えてもらいながらやりました。剣道がこんなにも厳粛なものだとは思ってなかったし、多くのことに驚きました。打ち方を習って打ってみると「パアーン」という竹刀の音がとても気持ち良かったです。でも、難しくなかなかうまく打てずに別のところをたたいて、友達に痛い思いもさせてしまいました。この授業をやって良かったと思います。



#### 胴打ちのパアーンという音が気持ちいい！

\*私は剣道について、全く分からなかったし、知りませんでした。正座とか声を出すとか、初めの方はイヤでした。声を出すのは、恥ずかしかったです。でも、終わりの方は慣れてきました。「剣道」や「書道」には「和」とうイメージは持っていたけど、「道」という字がふくまれているのは、その道を将来に向かって進むみたいな意味があっ

て、ちゃんとした伝統的なものだと知りました。剣道は戦うためのものだと勝手に思っていました。でも、自分を守るためのものだという事も知りました。また習いたいと思いました。



#### 後ろで蝶結びもできて日本人だなと思った

\*「痛そう」と思っていたのに、全然痛くなかった。剣道は楽しかった。最初は着け方から初めて、今では防具を着けて面を打ったり胴を打ったりできるようになった。それに「やー！」と大きい声で言うとストレス解消になってスッキリした。インターネットでも剣道を調べてみた。するといろいろなことが分かったので、それを生かして剣道をしたい。防具の片付け方がいまいち分からなかったけど、〇〇さんが教えてくれた。つばぜり合いをするときは、△△さんや◇◇さんがすごく大きな声が出ていて、私も大きな声を出そう！と思わせてくれた。先生も、間違えた方向に打ってしまったときに分かりやすく右の胴を打つことを教えてくれた。それから、礼の仕方も初めて知った。左手をついてから右手をつくということとか…。剣道のことをもっと知りたいと思った。



#### お互いの教え合いで着装時間も短縮できた

\*最初は難しそうだなあって思ったけど、覚えたら簡単で、すごく楽しかったです。体育の授業が待ち遠しいし剣道が楽しく、家でもお母さんにいっぱい話しました。面打ちとかをやっているときにパートナーが、めっちゃ思いっきり頭をたたいてくるので痛かったです。ちょっと頭にきましたけど、今回の授業で良い経験ができたと思います。道衣を着てみたかったけど、3年では剣道の授業はないのでしょうか？あったらうれしいです。



痛くないから大丈夫！と仲間が言ってくれた

\*初めての剣道、楽しかったです。かっこいいので、やってみたいとずっと思っていました。体育の授業で剣道ができて、うれしいです。面や胴を着けたときは、とても感動しました。自分なりにどんどん上手になっていったと思います。「やー」と大きな声を出すのが、最初は恥ずかしかったけど、そのうち慣れてきました。今では大きな声を出さないとやる気がでません。小学校のころはあまり体育が好きじゃなかったけど今はとても好きです。短い間だったけど、ちょっとでも剣道ができて良かったです。もっと剣道の授業をしたいなあと思いました。



今では大きな声を出さないとやる気が出ません！

\*はじめは授業で剣道をすると聞き、すごく不安でした。自分は普段から部活動で剣道をしていて、どのくらいの強さで打ったらいいのかとか、どのくらい声を出したらいいのかとか、わからないことがいっぱいでした。でも、授業でみんながとても楽しそうに声を出してくれてうれしかったです。剣道は、「痛い」とか「臭い」というイメージがみんなにとって強くて、「嫌だ」と言っている人もいたけど、だんだんと「楽しい」と言ってくれる人が増えたので良かったです。ほとんどの人が初めて剣道をしたと思うけど、活発にできていて授業が楽しかったです。来年の剣道がとても楽しみです。



交流できて友情が深まった気がした！

これらの感想から成果としてあげられることは、生徒達が剣道の授業を通して、自分自身に挑戦できる楽しさや、自分を出し切ることが体感できたと、自らの言葉で表現していることである。これは、技能の向上とは違い、目に見えない部分の成果ではあるが、確実に生きる力につながっていくものであり、武道の授業でねらってきた成果である。剣道の特性である礼を大切にしつつ、対人的な授業展開を行うことで、生徒達は相手の人格を尊重し、身体を鍛え、技を錬磨し、心を養うためのよき協力者としてお互いにかかわることが出来た。そこに本校のめざす、学ぶ意欲が芽生えてきたのではないかと考える。

また、三年生女子においては、剣道・ダンス・サッカーの中で事前に希望アンケートをとったところ、何と剣道が一番希望が多かつ

た。下級生が先に授業していたため興味があったのと、「龍馬伝」「乙メン」「武士道シックスティーン」等で剣道がかっこよく取り上げられている影響が大きいと感じた。初めは嫌だと答えていた生徒も、実際に授業をやってみると、もっとやりたいとか楽しいという感想が多くなった。三年生担当は剣道専門外の教員であるが、生徒達にDVDを見せると難しい技もやってみたいという良い反応が返ってきたりして、生徒達のやる気に感化され、授業が楽しく、次年度も指導者講習会に参加したいと話している。

課題としては、中学生の運動量に見合った授業を展開するために、単純な練習に終始しないで、攻防のある授業をできるだけ早い段階で取り入れたい。また、武道場が体育館と違って広い空間ではないので、本校のような大人数での場の使い方の工夫も必要である。誰でも授業ができる新しい剣道の授業づくりのために、まずは、みんながやってみて多くの課題を共有することが、武道の授業の定着への近道となると思う。

### 3 研究成果の普及

本年度の研究実践については、県中体連の研究発表会および集録を通じ、県下の中学校に発信できたので、各校の実態に応じて参考にしてもらえれば幸いである。

また、次年度高知県学校体育保健研究大会の授業校として本校三年生女子が授業を行う。それに向けた研究授業を行ったときに、参観した専門外の女性教諭から「私にもできそうだ」「ぜひ、やってみようと思った」などの感想をもらった。まずは、そういう気持ちになってもらうことが普及の第一歩だと思う。地区内中学校の中には、防具の購入が難しい学校もあるが、年間計画を工夫し、本校の防具を借りて授業を進める学校もある。本校は生徒数が多いため、所有する防具の数も多い。今後も本校を拠点校と

して剣道授業の定着を推進していきたいと考えている。

そのほかに、普及として取り組んだことの一つに「親子剣道大会」がある。剣道部の保護者（兄弟、姉妹も含んだ家族）、卒業生、地域の指導者の方々、学校の教職員が、在校生と試合を行い、交流をするというものである。これは生徒達にも保護者の方々にも教職員にも地域の方々にも大変好評で、剣道は世代を超えて学び合う道であるという考えから、今後も継続したいと考えている。

### 4 今後の展望

授業計画がしっかりとした形になり、生徒達にも教員にも浸透するまでには、まだまだ時間が必要だと考える。本校には現在、リーダーシップをとる専門教員がおり、一定の形が出来上がったが、専門教員がいなくなっても継続していける体制をつくっておくことが今後の課題となろう。そのため、地域と連携して相談窓口となる協力者バンクを充実させておくことや、実際の授業においては協力者にどの部分の指導をお願いするのをはっきりさせておくこと、未経験の生徒のつまずきを整理しておくと同時に、専門外で授業未経験だった教員のつまずきも整理しておくことが、改善策になると考えている。専門外でも目的が達成されるものをつくり上げなければならない。また、今後多くの実践例が作成され、県教科研究センターに資料が提供されるようになれば、多くの学校を剣道選択に導き武道の教育的効果を上げることにつながっていくと考える。さらに、専門教員自身の思い入れが強すぎて、目標水準が高くなりすぎないようにすることも大切ではないか。さらに、防具も竹刀も管理が大変であり、地域の武道具屋さんメンテナンスを協力依頼する等、今後も継続して、学校の実態にあった武道学習の在り方について、研究を進めていきたい。